追悼森本桂先生．我左様の事欲せず

保科英人
〒910–8507　福井県福井市文京 3–9–1　福井大学教育学部

I. 最後の職人昆虫分類学者逝く

令和元年 9 月 3 日，我が国の甲虫界の長老であらせられ，死の間際まで現役分類学者であった森本桂先生が亡くなられた．逝去される数年前から，こちらから送っているお歳暮等の礼状が遅れる，ないしは届かないこともしばしばあったし，体調を崩されがちであったのは承知していた．しかし，実際に亡くなられた，と聞くとやはり驚愕を隠せなかった． まずは先生の御冥福をお祈りする．筆者が先生の指導を受け始めたのは平成 7 年 4 月，九州大学大学院農学研究科修士入学に端を発する．そして，同 9 年 3 月筆者の修士修了と同時に，森本先生は定年退職された．

こう書くと，筆者は一応“森本桂最後の弟子”との肩書を持つと思われがちだが，はたしてそう誇ってよいものかどうか．森本先生はゾウムシの分類を直接専攻する学生以外は放任主義．論文の原稿を持っていけば，まあ見てくれるけど，普段は「勝手に研究やっとけ」との方針である．思い返せば，筆者は修士入学直後，「君の修士論文のテーマはおいおい話し合おう」と先生に言われたが，四半世紀経った今なお話し合いの場は持たれていない．何年後かわからないが，筆者があちらの世界に行った時，「僕の修士論文はどうしたらいいんですか !!」と先生に抗議させていただくことにしよう． 森本先生の後任の湯川淳一先生は「生徒指導は，放牧は良いが遊牧はよくない」と指摘されることしばしばであったが，森本先生の指導法を念頭に置いた発言であることは想像に難くない．

ただ，徹底放任主義のおかげで森本桂門下からは多士済々の分類学者が巣立っていったのは確かである．筆者なんぞはまだまだカワイイ方で，人の言うことなんか絶対に聞きやしねえ豪傑や変人，異才奇才が門下生にはずらりと並ぶ．

そんな森本先生だから，自分が採ってきた大型研究費で院生を海外に派遣する，などの発想はあまりお持ちでない．昨今の九州大学昆虫学教室の院生から「指導教官のカネで東南アジアに行く」などと聞かされると，隔世の感がある．おそらく森本先生は良くも悪くも我が国最後の職人昆虫分類学者である．「弟子である君は親方である私から技術を見様見真似で盗みなさい」と言うやつだ．

II. 好き嫌いは見事なくらい故佐々治先生と一致

故佐々治寛之先生と森本先生が若い頃からの大の仲良しだったことは有名だ．いつの頃の話かは不明だが，お二人で甲虫学の日本語の教科書を書こうと意気投合したそうだ．佐々治先生はかなりの原稿を仕上げたが（筆者は実際にその草稿のノートを見せてもらったことがある），結局その企画が日の目を見ることはなかった．その理由は佐々治先生からはうかがっていない．

佐々治先生は事あるごとに「森本さんはすごいんだ」と褒められていたが，森本先生との昔の思い出話を積極的にされる方ではなかった．筆者うろ覚えながらほぼ唯一の回想談がある．両先生大学院生の頃，某テントウムシ？が某植物から捕れるかどうかで，佐々治先生と森本先生の意見が割れた．そこで二人は「負けた方は勝った方にビールをたらふく飲ませる」との賭けをした．で，結局この賭けに勝ったのはどちらかとの肝心の結果を忘れてしまったのだが，賭けの後，二人の間ではそのテントウムシ？を「ビール虫」と呼ぶようになったと言う．

森本先生も佐々治先生も多少は他人の悪口を言われる方であったが，「あの先生は良い研究者」「こっちの先生は全然ダメ」との他人の好き嫌いが見事なくらい一致しているのである．とにかくこのお二方は万事につけ発想が似ておられる．同類嫌悪との言葉があるが，この二人には全く当てはまらない．よって，筆者にとって佐々治先生とのお付き合いは楽であった．森本先生と接するように振る舞えば，まず間違いはないのである．実際，佐々治先生が亡くなられるまで，筆者は先生のご機嫌を損ねることはなかった（はずである）．

森本先生が言われる悪口に関して余談．森本先生の悪い癖の一つに「自分の学生の悪口を他の学生の前で言う」がある．普通，院生が指導教官から「誰それ君はなってないねえ」と他の院生の愚痴をこぼされるとホッとする．「先生は僕のことを信用してくれているんだ」と思うからである．し

かし，この安心感は全くの幻想にすぎない．なぜなら森本先生は，甲君の前では乙君丙君の悪口をこぼし，乙君といる時は甲君丙君をけなし，丙君に対しては甲君乙君の文句を言うからである．とは言え，教え子は森本先生に悪口を言われていることを悲観する必要はない．絶対に先生の批判対象とならなかった野村周平・小島弘昭両博士は別格の例外だ．その他の少なからぬ教え子は本人の与り知らぬところで先生に文句を言われているはずだが，それ即ち先生に関心を持たれている証拠である．悪口を言われなくなったら，それはアウトオブ眼中を意味し，ゲームオーバーである．もし，生前の先生から筆者の悪口を聞いたことがある，との方がおられれば是が非でもご連絡いただきたい．筆者は心より安堵するであろう．

III．誰もそんなことは聞いていない

森本先生は口を開けば「あのゾウムシはさ，そのゾウムシはさ」「ジンマーマンがさ，ジンマーマンがさ」と，ゾウムシとジンマーマンの 2 単語を連発されていた．ジンマーマンとは 20 世紀半ばに活躍したゾウムシの分類の世界的権威だ（そのはず．よく知らないけど）．それだけならまだよいのだが，こちらから先生に如何なる話題を持ちかけても，とにかくゾウムシとジンマーマンの話にすり替えられる．その変換術は神業の域に達していると言えよう．「またゾウムシか」と辟易した筆者はおかげさまで，すっかりゾウムシ嫌いになってしまった．筆者は徹底したセミ愛護論者であり（『月刊むし』395 号参照），それ故にセミタケやセミヤドリガの存在を一切認めていない．そこで，この両寄生生物の話が出るたびに「お前ら，セミじゃなくてゾウムシか○○○○ムシに寄生しろ」とまで叫ぶようになった．

森本先生退官間近の時だ．先生は院生全員をゼミ室に集め，「今日は昆虫学教室の歴史の話をする」と宣言された．現在ならともかく，当時の筆者にとってはあまり興味がない話だったようで，その内容はほとんど忘れてしまった．しかし，先生が話し終えた後の展開は今もはっきり覚えている．筆者は，1）大東亜戦争中，学徒出陣で戦死された昆虫学教室の学生はいるのか，2）安保闘争の頃の昆虫学教室の様子はどのようなものであったか，と質問した．（1）については「いる．○○さんが戦死された」と明確に答えられた．問題は（2）の方で，こっちは安保闘争の時期の九大内の混乱ぶりは如何ほどであったか，その頃の昆虫学教室の学生は右か左のいずれだったかを知りたいのに，なぜか先生の回答は当時の生防研の人事が揉めたとか，どうでもいいものばかり．

これでお分かりいただけたであろう．本稿の副題「我左様の事欲せず」とは，森本先生のセリフではなく，筆者の心の慟哭である．とにかく，こちらが尋ねていることに先生が一発で答えてくれないこと，あらゆる虫の話がゾウムシに変換されることなんぞはザラである． 筆者は何度先生に詰問しそうになったことか．「誰もそんなことは聞いとらん！」と．

IV．大東亜戦争と九州帝大

森本先生は昭和 9 年生まれなので，九州大学入学は戦後である．しかし，江崎悌三か安松京三のいずれかから聞いた，大東亜戦争中の九州帝大の様子を筆者に語ったことがある．戦時中，教授連も学生も軍事教練に駆り出された．普段は小使いさんをアゴで使っている教授たちであるが，軍事教練の際は逆に小使いさんが偉そうに教授連をしごいていたと言う．教練の際は軍隊内の階級が最も高い者が指導するとの決まりがあった．そして，小使いさんは現役兵の頃は下士官の者も多かったから，教練の時だけはふんぞりかえっていたわけだ．

問題は次だ．ここで書くべきかどうか悩んだが，誰かが書き残さねばならぬとの結論に至った．ある時，森本先生曰く「安松先生は戦争中，医学部に手を回して，肺に病気があると偽って，軍への召集を免れた」確かに当時伝染性が高い肺の病気を持っていれば，兵役を免れることができたのは事実だ．しかし，上述の通り，学徒出陣で戦死した昆虫学教室の学生がいる以上，先生の話が真実とすれば，安松の名誉に関わる大問題となる．

筆者は森本先生のこの話が心に引っかかっていた．しかし，当時のことを直接知る故伊藤修四郎先生宅を訪問した際，このことを尋ねる勇気はなかった．伊藤先生宅には江崎・安松両者の写真が飾られていた上，先生の言葉の端々から安松を心より尊敬していることが明らかに見て取れたからである（保科，2017）．幸いに，と言うのも変だが，故黒子浩先生宅を訪問した際は，根掘り葉掘り遠慮なく話を聞くことができた（保科，2019）．そこで「大変うかがいにくいのですが……」と前置きしつつも，安松が仮病を装って召集を免れたのは本当か？とストレートに質問した．すると黒子先生は「いやあ，聞いたことないねえ」と否定された．結局，森本先生の話が真実か否か，真相は闇の中である．

V. あんたバカね

筆者は戦前生まれの昆虫学者たちの戦争体験を聞きまわっている（保科，2018）．森本先生は 10 歳余で敗戦を迎えられたから，筆者のヒヤリング対象の有資格者のはずだ．しかし，遠路はるばる福岡まで出向いたところで，どうせゾウムシとジンマーマンの話しか返ってこないことは目に見えている．よって，先生に改めて戦争中の体験を聞きに行くことはなかった．

しかし，平成 27 年，筆者が九大帝大付属彦山生物学研究所（現在の農学部付属彦山生物学実験施設）の実質的設立者である高千穂宣麿男爵（1864–1950）を調べていた時のこと．森本先生が学生の頃，江崎悌三のシャルロッテ夫人に拙いドイツ語で挨拶したところ，「あんたバカね」と愚弄された，との話をふと思い出した．実は，シャルロッテ夫人は高千穂宣麿の後妻的立場の女性（ようするにお妾さん）と相当親しかった（保科，2015b;2016）．よって，筆者は高千穂宣麿の小伝を書く際にシャルロッテ夫人のこの逸話を盛り込もうと考えたわけだ．しかし，何ぶん 15 年以上も前に森本先生から聞いた話なので，今一度確認を取る必要がある．さらに，高千穂のお妾さんは宣麿が昭和 25 年に死去後も彦山生物学研究所に出入りし，昆虫学教室の学生の面倒を見ていたことも筆者は把握していた．そこで，森本先生の口から彼女のことも聞き出そうとしたわけである

とは言え，森本先生に「高千穂宣麿のことを調べているから話を聞かせてください」と正直に申し出たところで，いい顔をされないことはわかりきっている．「そんな暇があるなら 1 種でも多くの新種を書け」と説教されるのがオチである．そこで，平成 27 年 5 月末，筆者は九州大学総合研究博物館で研究を続けられていた森本先生をアポなしで訪ね，「自然な話の流れの中」で上記のことを聞き出す作戦を立てた．この頃，筆者は高千穂宣麿と並行して蝶類学者の仁禮景雄（1885–1926）のことも調べていた（保科，2015a；2015c）．そして，仁禮の蝶類コレクション調査のために標本を保管している九大昆虫学教室に赴く必要がどうしてもあったのである．

筆者が大学博物館で森本先生に会ったのは同年 5 月 28 日．実はこれが先生と直接会った最後の機会になったわけだが，もちろん当時は知る由もない．筆者は「森本先生．ご無沙汰しております．標本調査のため九大にやってまいりました」とにこやかに挨拶する．うん，嘘はついていない．ただ，調査対象標本が数ミリの甲虫ではなく，でっかいチョウチョなだけである．

先生のゾウムシのマシンガントークが始まった．対馬のゾウムシがどうのこうのと言われていたような気がするが，「どうゾウムシの話を遮って，シャルロッテ夫人と高千穂のお妾さんのことを切り出すか」とのタイミングを必死に計っていたため，内容は何も覚えちゃいない．例によってお腹いっぱいのゾウムシの話を一方的に聞かされたわけだが，1）森本先生はシャルロッテ夫人に気を利かして，自分からドイツ語で挨拶をしたわけではない．夫人が「ドイツ語で何か挨拶しろ」と要求してきたから，仕方なく頑張った結果，「あんたバカね」と冷笑された．しかも，何度も繰り返し挨拶させられたが，結局夫人から合格を貰えなかった．先生曰く「ドイツ語なんか文法しか習ってないんじゃから，会話なんかできるわけないんじゃ」全くもって仰せの通りでございます．2）先生は学生時代に一度だけ高千穂のお妾さんの家で食事を御馳走になったことがある．その時，彼女と自然や昆虫の話をしたような記憶がある，との回想談を何とか引っ張り出すことに成功した．時間効率は大変悪かったが，とにかく筆者の目的は達成できたわけである．

VI. 先生の教えを今なお堅持す

森本先生は他の追随を許さない甲虫分類学者であらせられた．半世紀以上もコツコツと同じ研究を積み重ねてこられたことはただただ礼賛するばかりである．また，筆者が最後にお会いした時，つまり先生の最晩年だが「丸山（宗利）君に教えてもらって深度合成撮影を自分でやっているんだよ」と，逝去される寸前まで新しいことに挑戦する意欲をお持ちであったことにも驚きを隠せない．筆者は四半世紀でもって分類，と言うより虫への情熱が尽きてしまったので，なおさらその感がある．図 1 はオキノシマツチゾウムシ *Trachyphilus okinoshimanus* Morimoto, 2015 である．森本先生や福岡県の職員と共に，今や世界遺産となった筑前沖ノ島に渡り，筆者が捕った個体がめでたく新種として記載された思い出の一

図 1. オキノシマツチゾウムシ.

図 2. テンタキツヤツチゾウムシ.

品だ．この他，テンタキツヤツチゾウムシ *Asphalmus hoshinai* Morimoto, 2015（図 2）など，先生著の『The Insects of Japan』ゾウムシパートには筆者の採集品が少なからず使われているようだ．良きかな良きかな．

森本先生退官間近の頃．「いつぞやのマメゾウシンポジウムで作った法被，君いらんか？」と言われたので，躊躇うことなく「下さい」と即答した．さらに「せっかくなのでサインしてください」とおねだりした．この法被は今も大事に保管してある（図 3）．なお，この時，先生の研究室に飾ってあった外国のセミの玩具もよこせと要求したのだが，それは断られた．

森本先生の直系の弟子のある方は「森本先生は尽くしても報われるとは限らない」と評する．ようするに先生のお気に入りになるのは大変，との意味だ．確かに，大学院修士時代，そしてその後も，筆者は森本先生に愛されたい，愛されようと相当頑張った口だが，結局は片思いで終わった気がする．

先生から見て筆者は不肖の弟子ではあっただろうが，それでも先生の教えを頑なに守り続けていることがある．一つ目は「スケッチは覚えているうちにすぐに墨入れしなさい．下書きのまま長く放置したものは，後になって役に立たない」二つ目は「とにかく一つでも多くの文献を引用しなさい．論文の良し悪しは引用文献欄を見ればすぐにわかる」例えば，日本に甲乙丙 3 種のクワガタがいるとしよう．甲種が新種として記載されたのが A 論文，乙が B 論文，丙が C 論文とする．そして，甲乙丙 3 種を再検討し，検索表をつけたのが D 論文とする．この場合，「日本にクワガタは 3 種いる」と言いたければ，D 論文だけ引用すれば事足りるわけだが，森本先生は，それではダメだと仰る．ABCD 全ての論文を引用せよ，と言うわけだ．

先生の影響をもろに受け，筆者は“引用狂”と化した．筆者は本誌の拙文中で普通の虫屋ではまず引用できない文献を記していることがある．この場合，行間には「ま，俺は君タチ普通の虫屋では到底知り得ない文献にも目を通しているんだよ」との優越感が隠されていると理解して貰って結構だ．筆者に論文盗用はありえない．別にモラルが高いからではなく，盗用するぐらいなら引用したいからである．

図 3. 森本桂先生サイン入り法被．右は佐々治寛之先生愛用の叩き網．親友同士の遺品を並べた．

VII. 謝辞

森本先生著『The Insects of Japan』に掲載された筆者採集品に基づくゾウムシの新種の情報と写真を提供してくださった，九州大学大学院の今田舜介氏に厚く御礼申し上げる．

引用文献

保科英人 , 2015a. 蝶類學者仁禮景雄先生小傳 . 日本海地域の自然と環境 , (22) : 111–131.
保科英人 , 2015b. 博物學者高千穂宣麿先生小傳 . 日本海地域の自然と環境 , (22) : 133–223.
保科英人 , 2015c. 謎の蝶類学者仁禮景雄 . きべりはむし , 38 (1) : 20–24.
保科英人 , 2016. 若人に託した科學一等國の夢～昆蟲男爵高千穂宣麿の生涯 . きべりはむし , 38 (2) : 38–47.
保科英人 , 2017. 追悼伊藤修四郎先生 . 高千穂宣麿最後の知己 . きべりはむし , 39 (2) : 53–57.
保科英人 , 2018. 明治 150 周年．新時代の土壌性甲虫の楽しみ方 . ～落ち葉下の数ミリのマルバネクワガタ . 月刊むし , (568) : 2–9.
保科英人 , 2019. 追悼黒子浩先生．「高千穂採集標本」をめぐる謎 . きべりはむし , 41 (2) : 41–49.